中國新時期の詩的言語の特性について

―戈麥詩論―

是永駿

はじめに

中國同時代詩は七八年の『今天』創刊によって詩の生命を蘇らせ、その後、さまざまな詩的言語の實驗を經て今日に至っている。『今天』は權力の言語統制に叛旗を翻し、詩的想像力の解放へと詩人たちを導いたのであるが、同時に「詩と權力」の問題に直面することになる。さらに八九年の「六・四」を契機に多くの作家、詩人が出國しエグザイルとなるに及んで「詩と亡命」という問題にも直面する。新時期二〇年の間の同時代詩が我々に提起するこの二つの問題をいかに解明するか、本論はその解答を詩的言語そのものの分析から導き出そうとするものである。戈麥は八七年に本格的な詩作を始め、九一年には自死するという短い創作年月でありながら、その詩的言語の達成は二つの問題への根底的なアプローチへと我々を導く「衝擊力」を具えている。

戈麥（本名 褚福軍）の略歷は「戈麥生平年表」（褚福運、桑克、西渡作成）[1]に詳しい。この夭折した詩人のプロフィルを簡略に記せば

一九六七年八月黑龍江省蘿北縣に生まれる。八五年北京大學中文系に入學、「朦朧詩」派の北島、多多、食指らに傾倒、八七年本格的に詩作を始める。八九年卒業、外文局『中國文學』雜誌社に勤務。九一年九月北京西郊萬泉河に入水自殺。沒後出版された『戈麥詩集』には約一四〇篇の詩が收められている。

ということになる。『戈麥詩集』（以下『詩集』）の跋（西渡）によれば現存の二七〇餘篇の中から選んで詩集を編んだとのことであるが、筆者が目にしえたのは、『詩集』の一三九篇のほかに、戈麥、西渡の二人詩誌『厭世者』[2]に發表された五〇篇のうち『詩集』に收錄されなかったもの十二篇、西渡氏から提供された「戈麥集外詩選」十篇、合わせて一六一篇である。戈麥の生前に『一行』（ニューヨーク、「一行社」）に掲載されたもの、沒後各詩誌が掲載したもののうち既見のもの[3]はいずれも『詩集』に收められている。戈麥は詩篇のほかに、北京大學在學中に九葉派および北島に關する論文を書いている[4]。なお日本で戈麥を紹介したものに『るしおる luciole』に掲載された譯詩十篇がある[5]。

一　新時期詩壇における戈麥の位置

一九七〇～七八年にわたるプレ新時期の北京地下文藝集團の鳴動が[6]『今天』創刊（一九七八年十二月）という劃期的な文學事象を生み、

『今天』は言語統制に叛旗を翻し詩的想像力の解放へと詩人たちを導いた[7]、これはすでに衆知のことと言える。『今天』派（朦朧詩派）は何かある詩法を共有したわけではないが、『今天』に集った詩人の多くが制度的なものへの不信、反權力の姿勢をどこかに保っていたのはこの地下文藝雜誌の成り立ち[8]からして當然のことであった。『今天』は詩の生命を蘇らせるとともに、「詩と權力」という難題をも引き寄せることになる。『今天』の停刊處分（八〇年九月）という權力の行使に既成の文壇が沈默して何の支援の手も差しのべなかったことに、同時代の中國文學がかかえる「權力」の問題の根深さを知ることができる。『非非』の創刊（一九八六年五月）に代表される實驗詩の提唱は、「權力」とかかわる狀況批判的な要素を排した、制度的なものとは無緣の詩的言語の深化を目的的に追求しようとしたものであり、「感覺・意識・言語の復原」を謳うそのマニフェストに盛られた探究の精神は評價に値する。『今天』派の後、八十年代中葉以後に登場した詩は實驗詩、第三代詩、ポスト朦朧詩などと呼ばれ、一部に「PASS北島」を旗印に掲げる者もいたが、北島の長詩「白日夢」（一九八六）や流亡後の詩集『ブラックボックス』[9]、芒克の長詩「群猿」（一九八六）や組詩「時間のない時間」（一九八七）、顧城の作品群などを見れば、彼らが先鋭な現代精神の地平に立ち、いわゆる第三代詩人らの挑戰をしりぞけて高い詩的達成を獲得していることは明らかである。世代論という「時間神話」[10]は詩的言語そのものの探究とは何の關わりももたない。『今天』派の詩人も自らの詩的言語を深化させていったのである。『後朦朧詩全集』[11]に收錄された宋琳、歐陽江河、陳東東、翟永明、刑天、海子ら七十三人の詩人は八十年代中葉以後に活躍する詩人たちであるが、戈麥の詩人としての出發が八十年代末であるためか、このアンソロジーに戈麥は含まれていない、あるいは發見されていない。戈麥は無意味な世代論とは無緣な地點でたえず實驗的な試みを追求し續けたその詩作活動の初期に、北島を深く研究し、四十年代の九葉派をもその視野に收めている。詩の言葉のもつ衝擊度は、人間の意識の多樣な側面に多層なレベルにわたって働きかけるものであろうが、いま「衝擊度」を「制度や信仰が抑壓をともなって保存され强化される時、その抑壓への內面的抵抗をいかに强固に形づくるか」という意味において用いるとすれば、詩的言語の分析（後述）から明らかなように、その詩の持つ衝擊度という點において、この夭折した詩人戈麥は宋琳[12]とともに新時期の詩的言語の深化の極北に位置すると考えられる。

二　戈麥の詩的言語

戈麥の詩を、八九年を境として神性と死（解體）への傾斜を强めた同時代詩[13]の文化的文脈の中に置いて讀むことは可能であるが、その詩的磁場の破壞力はより根底的には彼自身の哲學的思索そのものに導かれていた、と考えられる。詩における divinity については、「宇宙の闇に溶け入る韻律がかろうじて神的なものの緣に到達する、それが詩歌の可能性の果てにあるもの」[14]なのだと思うが、その韻律（口語自由詩では詩人自らの內在的韻律）を帶びて詠われる詩は生、死、再生への洞察を深めることによって神性へと向かう。

この苦難のとき
この目に映るのはもうひとつ別の人類の
きのうの姿かと[16]

（「黃昏の星に獻げる」の中の一節）

この詩に現れる「わたし、それはわたしの一生の果てしない暗黑」と

いう言葉には自己の存在を「絶對性」の探究のうちに置く意識が見られ、「もうひとつ別の人類」の「昨日」を眼前に見る「視覺」[16]は同時に我々という人類の「今日」「明日」をも見てしまっている。

「絶對性」への意識は、ものごとの表層での肯定・否定とは異なる次元への意識であるから、「一生」を浸す「果てしない暗黑」の内にある「わたし」はある時には、

わたしは葦よりもずっと細い指先を伸ばす
風よ、心して吹きすぎてくれたまえ
わたしの感覺に非のうちどころはない
わずかの誤差も許されない
きみは二滴の雨だれのあいだを吹く風のように吹きすぎるのだ[17]

（「風」の中の一節）

と、自らの感覺への「絶對性」、この場合は絶對的な信頼を詠うのである。人類をも相對化する「視覺」は、いわゆる「エグザイル」に新たな意味を付與する。「流亡」や「亡命」は逼られて選擇した生存狀況であるとともに、詩人の根源的存在としてもとらえられる。北島はその「エグザイル」としての根源的存在を權力と言語のレベルでとらえた[18]のであるが、戈麥の詩は詩人の存在に「この世へのエグザイル」という意味を新たに付與する。生まれ落ちた地に生きるという、ある意味では選擇の餘地のない逼られた生存狀況にあって、詩人はあたかも宇宙の果てからの流亡者であるかのように自らの内に宇宙的なもの、神的なものを打ち立てる營みにいそしむ。そのような意味での「この世へのエグザイル」としての存在である。こうして戈麥の詩は「詩と權力」とともに中國同時代詩が直面したもうひとつの問題「詩と亡命」に對するまったく新しいアプローチへと我々を導くのである。

戈麥の詩に見られる解體と遊離の意識はこの「絶對性」と超越的な「視覺」によって精度と純度を高め、ある一點への凝集と解體を永遠に繰り返す、破壞力を具えた詩的磁場を形成する。『詩集』の編者西渡が「奇跡のように彼の獨特な死を豫言した」詩であるという「泳ぐ」もその磁場の胎動によって詠われる。

「泳ぐ」[19]

つづけざまに引き裂かれた夜
わたしは窓にかかる水蒸氣の上を歩む
テーブルクロスの上の淡い青色の花瓶が
わたしの馥郁たる笑いを咀嚼する
わたしの意志は空中に平衡を保ち
時にはくるりと反轉する
時間に浮かぶ環（わ）のように
そして骨格は肢體（からだ）から滑り出て
わたしが制壓する領地から泳ぎ出る

つづけざまの幾夜
わたしの肉體は洪水に蹴散らされ
わたしはひとり廣々とした水面の上を歩む
白い斑點（まだら）模樣の水面に誇りといえるものが注入され
種子は時間から逃走する
焚（や）かれたひとにぎりの泥土が
夜を徹してほの赤い炎を略奪するように
わたしは育んでいる——めぐり來る春を

子宮の中を立ち昇るフォルムが
毒藥のように、わたしを腐蝕させている
まるで誇りが
勝利者の神經を腐蝕させているように

この詩の中の「わたし」は、「わたし」という存在を意識の或る一點に凝集して、「意識としてのわたし」に變容させたものであり、そのメタモルフォーゼが骨格や肢體の解體・遊離を可能にしている。花瓶（「馥郁たる笑いを咀嚼する」）や泥土（「ほの赤い炎を略奪する」）という物質と「誇り」（「神經を腐蝕させる」）という抽象概念を等價・均質のものとしてとらえるのも、この變容された「わたし」には自然な展開なのである。線的な時間の流れからぬけだした「わたし」は「めぐり來る春を育む」生の根源のただ中にいるのであるが、その「わたし」の中で、「生」を育むものが「腐蝕」を進行させている。戈麥はこのように詠って、「生」と「死」が同時進行するという人間存在の根源に降り立つのである。

戈麥の詩的感性は、「雪は內心の原野に燈（とも）り／わたしはひとすじの炎の緣をはらいのける」「炎は、その中心の闇を取り圍んでいる」（「炎」の中の詩句）「盡きない生活は砂／わたしは陸地のすべてのきらめく名前を數えつくした」（「砂」）などに見られるように、その哲學的思索の深さとともに輝いている。次のような詩句は、「六・四」後の文化的文脈の中で讀めば、戈麥の詩的言語が國家の暴虐を根底的に擊つ破壞力を祕めていることを我々に知らしめる。

心にしみいる蜂の香りがつややかな綿の花を慰めている
はじける銃彈の火花が人々にはっきりとわからせる
乳房の中の血の滴り、血の滴りの中の細い河
それはあたかも針の先にかけられた花環、花環の中にたゆたう大海[20]

（「夢に美を見る（二）」の最終聯）

この詩においても、意識は一點に、一切は一點に凝集し、凝集した地點、「針の先」に「花環」がかけられ、その一點からまた意識が放射されて「大海がたゆたう」。その凝集と放射という意識の運動が「抑壓への內面的抵抗」を彈力のあるものとして形づくり、言葉の根底から國家の暴虐を擊つのである。

三　戈麥の北島研究

一九八八年に書かれた戈麥の二篇の論文[21]のうち、九葉派に關するものは、一〇年代から四〇年代にかけての現代詩を概觀する中で、鄭敏、穆旦らの九葉派がとりわけ現代人の內的世界を發掘した點で八十年代の新詩潮詩の隆盛に直接影響を與えた、とする。この論考は概論的なものであるが、北島に關するものは、北島の思想と詩法の關係を解き明かした出色の北島論（二萬八千字）である。論文は「北島出現的文化背景」「北島的心態歷程」「北島詩藝研究」「《白日夢》淺析」「北島在中國詩壇・結束語」の五章からなり、「序言」が付されている。この北島論に戈麥自身の詩論を探り、戈麥の詩の解讀に有効な視點を抽出しておきたい。

戈麥は「プロレタリアート獨裁」の背後に「ファシズム支配」を見通し、「文革」は政治指導者同士の殺戮（「自相殘殺」）に終始した「內亂」であると見る。その狀況認識は透徹していると言えよう。「文革」という內亂によって「價値體系は崩壞し、無殘なユートピアが廢墟として殘される」。そうした狀況下で北島の詩は「わずかに殘された生

存方式と魂のよりどころ」として書かれた。その詩の世界を解析する戈麥の目は、自己の生存、存在の根源的な狀態において世界の表象を認識する北島の主體的認識そのものの特性とその變容に注がれる。前期の「最後のひとりの英雄の殉難者の悲涼」という英雄主義的色彩から後期の不條理へと向かう北島の思想遍歷を、世界の表象の認識のプロセスとしてとらえるのである。「自己の內面に形成された「主體性」のきわめて强い認知の習慣と、この世界への透徹した悲觀的な認識をもつ北島にとって、今ある自分の生存狀態を受け入れるのは耐え難いものであった」とする分析は北島の詩篇「習慣」の解釋へと導かれる。「習慣」は、

わたしには習性となった、きみが暗闇の中でタバコに火をつけてくれる
その火がゆれて、きみはいつもこっそりとたずねる
あててみて、どこをやけどしたか

という第一聯で始まり、最終聯は、

そう、わたしには習性となった
きみの打つ火打ち石があかあかと燒いている
わたしの習性となった闇を[22]

である。この最終聯を戈麥は、彼（北島）はすでに「習性となった」「火打ち石があかあかと燒く」「わたしの習性となった闇」その闇を習性とすることを拒否している、と讀む。たしかに「習性となった闇」を燒く火打ち石はその闇を否定するものとして存在する。こうして詩篇は詩人自身の認識のあり方と表裏一體のものとして、この北島論の中で縱橫に言及される。虛無的な生存狀態が忍びがたいものとしてあるかぎり、「悲觀」的になるのは避け難い。しかし北島の「悲觀」は「主體の可能性を內密に隱してしまう虛無へと向かうのではなく、逆に、形而上的な全否定へと向かう」。そして「主體がとる「否定」のプロセスを否定せず、表象の背後にあるものを探知しつづける」。世界の表象は不條理に滿ち、不條理は目的をもたない。世界を「無目的性」と認識した北島は形而上的な全否定へと向かい、不條理をまったきかたちで受け入れて、價値の否定、價値の虛無を核心とする新たな哲學へと到達する。悲觀の果てに到達した「超脫」の詩境への契機を戈麥は詩篇「冬に向かう」に讀み取っている。

風が、雀の最後の體溫を
落日に向けて吹きとばす

の二句で始まるこの詩は最終聯、

冬に向かって行こう
河が凍りついたところに
路は流れはじめる
カラスは河原の丸い小石に
一つ一つ月を孵化させる
目覺めた者は、知るだろう
夢はやがて大地に降り
沈殿して明け方の寒霜となり
疲れ切ったあの星座にとってかわるだろう
罪惡の時はまもなく停まるだろう
そして氷山が連綿と續き
一時代の人々の塑像となる[23]

と歌われる。この詩は「冬というこの別の魂の新生を可能とし、汚れを洗いおとす境地への宗教的な憧れ」を歌ったものであり、「變容と

昇華への期待」がこめられている、それは強烈な個性が虚無へと向かい、悲觀の果てに獲得した境地だと言うのである。この「超脱」の境地を得て、北島は不條理をまったきかたちで受け入れ、永久的な不可知と神祕とに永遠に向かい合うことになる。それは根源的な懐疑に向かい合うことでもある。戈麥はここで「死はただ一歩を隔てるのみ」「老いはただ一歩を隔てるのみ」（「この一歩」）や、「疑わしきはわれらが愛」（「疑わしきもの」）「自由は一片の空白」（「空白」）などの詩句を例句としてあげている。

前期の「英雄主義的色彩」がしだいに影を潜め、不條理のまったき受け入れとともに、不可知の不條理な存在と神祕を前にして、「何も選擇しない。選擇すべきものは何もないのだからその必要はまったくない」という哲學的命題を得た北島は「價値の虚無を核心とする哲學」を我々に提供する。その認識のプロセスで詩法もシュールレアリスムへの傾斜を深め、詩は表象をつきぬけて直接本質を表現し、個人の特性よりは人類の普遍的なものを重視するようになり、主體は詩の中で記號化する（世界を觀照する視點としてあるのではなく、椅子やりんごや石などと同様に觀照される物象のひとつとして存在するにすぎない）。そしてこうした認識と詩法が集約されたものとして長詩「白日夢」を詳細に分析し、北島の詩的言語の到達點として高く評價するのである。この長詩の中で「あなたは約束の日に歸ってこない」が何度かリフレインとして用いられるほかにもこの「あなた」がたびたび顔を出すが、戈麥はこの全編を貫く「你」の影、終に明らかにされない「你」の多義性をみごとに解き明かす。すなわち、「異郷にある戀人／ともに頼り合う配偶者／もうひとりの自分／ある願望／人類が追求するある超感覺／意味をもたない記號」としての「あなた」である。

「詩の解析はわたしに詩への罪を犯させた」と結ばれたこの詩論は、詩の營みというものへの畏敬の念に貫かれている。解析された北島の哲學、詩法はそのまま戈麥自身のものでもあると言えよう。北島を徹底的に解析するプロセスは、戈麥が「詩と權力」、「詩と亡命」の問題への詩的言語による根底からの解答を可能にする彼自身の哲學と詩法を獲得するプロセスでもあったのである。

注

（1）西渡『戈麥詩集』（一九九三年八月漓江出版社）所收

（2）半月刊、一～五期、一九九〇年

（3）生前に『一行』十二期に一篇、十三期に二篇、十五期に一篇を掲載、沒後は十六期（一九九二年四月）に六篇、二〇期（一九九三年九月）に一篇（再錄）、『一行五周年紀念集』（一九九二年五月、上海・湖南・紐約）は卷頭に二篇を掲げる。ほかに『今天』二〇期（一九九三年一期）に四篇、『現代詩』季刊十八期（中華民國八一年九月）に二篇、『啓明星』二二期（清水賢一郎氏提供。發行年月未詳。一九九一年一一月二二日付けの「編後記」あり）に七篇を收める。

『一行』十六期に收められた六篇のうち、「誓言」が同二〇期に再錄されているが、この「誓言」の第二聯、

對于我們身上的補品，抽乾的校樣
愛情、行爲、唾液和革命理想
我完全可以把它們全部煮進鍋裡
送給你，渴望我完全垮掉的人
（われらにさずけられた滋養劑、ひからびきった校正刷りに
　愛、行爲、唾液それに革命の理想
そんなものは一切合財鍋に煮込んで
おまえにくれてやる、わたしがあとかたもなくつぶれてしまうことを

渇望するおまえに）

の第二行にある「革命理想」が『詩集』では「遠大理想」となっている。その間の經緯についての筆者の問い合わせに對し、西渡氏は「出版社のその場凌ぎの手立て（「權宜之計」）である」と回答してきた。とすれば、原稿段階では「革命理想」であったのを出版社が勝手に手を加えて修正したということなのであろう。

（4）二篇の論文原稿は、長兄褚福運氏のご好意により拜見することができた。

（5）『るしおる』三〇號（書肆山田、一九九七年三月）に掲載されたのは次の一〇篇（拙譯）。「泳ぐ」「家」「生命の中のあまたの刻（とき）」「厭世家」「火」「砂」「昨日の黄色い花」「海子（ハイズ）」「風」「夢に美を見る（二）」

（6）地下詩壇については、多多「一九七〇―一九七八　被埋葬的中國詩人」（『今天』十周年紀念號、一九八八年十二月。のちに「北京的地下詩歌」と改題して『今天』十二期、一九九一年No.1に掲載）、趙南『今天』文學と〈七九年〉民主運動」（『芒克詩集』書肆山田一九九〇年十月所收）、北島「關於《今天》」（『野草』五五號、一九九五年二月。日譯は『現代中國詩集』思潮社一九九六年七月に收める）などを參照されたい。

（7）この觀點については拙稿「中國現代詩論」（『中國現代詩三十人集』凱風社一九九二年二月所收）、「現代詩の生成」（『現代中國詩集』所收）などですでに提起した。なお、『今天』一～九期及び內部資料として發行された「今天文學研究會」一～三期の全號が『今天（一九七八～八〇）』にまとめられて日本で覆刻出版された（中國文藝研究會發行、一九九七年）。

（8）注6の各評論のほかに、北島の「回想」（『ブラックボックス』書肆山田一九九一年十一月所收）を參照。北島はこの「回想」の中で、七八年の『今天』發刊が權力者による言語統制への挑戰という意味をもつことに觸れている。

（9）最初『黑盒』（ブラックボックス）のタイトルで出版され（一九九〇年、スウェーデン、中國語・スウェーデン語對譯）、それに新作二〇篇を加えて日譯本が出版された。英譯はタイトルを〝Old Snow〟に改めて一九九二年出版。

（10）吳思敬「九十年代中國新詩走向摭談」（『文學評論』九七年四期）によれば、唐曉渡の指摘する「時間神話」（時間を神聖視し、時間的に先にすすんでいること自體に價値を置く考え）への信仰は新世代の詩人ほど著しく第三代、四代、五代はおろか第六代という呼び方まであるという。

（11）萬夏、瀟瀟主編『中國現代詩編年史・後朦朧詩全集』上・下卷（四川敎育出版社、一九九三年八月）。このアンソロジーの成果は老木編選『新詩潮詩集』上・下卷（一九八五年一月）に匹敵する。

（12）宋琳については、『るしおる』十九號（一九九三年十月）に散文詩二篇「映像の自焚」「魔術師の家」、『新潮』九五年一月號（小特集「世界の詩の現在」）に詩二篇「懷かしむ」「空白」を譯載した。小特集の解說の中で、澁澤孝輔氏は宋琳の詩について「サンボリスム、シュルレアリスム以後の世界の近・現代詩の富を、「今天」世代以上に消化し盡してしまっている」と評している。

（13）拙稿「神性・解體・周緣――中國詩の現在」（『へるめす』四五號、一九九三年九月）參照。宋琳は「下獄の書」（一九八九年八月三一日記。詩集『最後の煉獄　白夜』（一九八九―一九九〇／上海）所收）の中で、「詩は一切の日常の習俗を超越して神性を獲得すべきこと、詩とは純粹に個人の神話の中に確立された唯一無二の價値であること」を說いている。

（14）前注拙稿三三頁

(15) 原詩：在這艱難的時刻／我彷彿看到了另一種人類的昨天（「獻給黃昏的星」）

(16) その「視覺」の奥にある思索は、たとえばシンボルスカの次の詩句を思い起こさせる。

「あるいはこれも單に無意味な戯れか／たかだか二、三の銀河系に亘（わた）る惡戯（いたずら）なのかも」（ヴィスワヴァ・シンボルスカ『橋の上の人たち』工藤幸雄譯、書肆山田一九九七年七月）

(17) 原詩：

我伸出比蘆葦還要細的指尖／風呵、你要小心翼翼地從中吹過／我的感覺異常完美／不容得一絲偏差／你飄逝得像兩只雨水之間的一陣風

(18) 北島「鍵のない家　詩と亡命」（菅原邦城譯、『るしおる』十三號、一九九二年三月）。これは北島がスウェーデンPENクラブからトゥホルスキー奬學金を授與された際の答辭である。この奬學金は「亡命文學者に創作を可能とする平安な時間を與えることを目的として創設された」（譯者注記）ものである。北島は答辭の中で、詩と亡命、詩と權力について次のような興味深い見解を述べている。

「詩人というものは元來、詩を書き始めた日から亡命の道を歩むものです。ある意味では、詩と亡命はほぼ同意義の概念であります。詩人は時代を支配している文化と言語に絶えず挑戰を行い、この役割が意味するものは、詩人は決して定住の地を持たないということです。文化と言語を制御しようと試みる權力者たちは當然ながら、詩人を國家の敵と見なすことがあります。その結果として、外面の亡命によって詩人の內面の狀況が强化されるのです」

(19) 原詩：「遊泳」

連續幾個開裂的夜晚／我在窗子的水汽上行走／臺布上淡藍的花瓶／咀嚼我馨馥的笑／我的意志平衡在空中／有時牠翻轉過來／像一只漂浮黑暗中的環／而骨骼從肌體裡滑出／遊出我所控制的領地

連續幾個晚上／我的肉體被大水沖散／我獨自在空曠的水面上行走／一種驕傲灌輸到花白的水上／種子從時間中逃走／像一把焚燒過的泥土／劫走整個夜晚暗紅的火焰

我製造着——下一個春天／子宮中上昇的形體／毒藥一般，腐蝕着我／猶如驕傲／腐蝕着勝利者的神經

(20) 原詩：

沁人的蜂香安慰着晶瑩的棉朵／子彈爆裂出的火花更能讓人懂得／乳房中的血滴，血滴中的小河／就像針尖上有花圈，花圈裡有汪洋

(21) 褚福軍「異端的火焰——北島研究」、「起風和起風之後——九葉詩派現象研究與中國新詩的回顧」

(22) 原詩「習慣」の引用部分：

「我習慣了你在黑暗中爲我點煙
火光搖晃，你總是悄悄地問
猜猜看，我燙傷了什麼
「是的，我習慣了
你敲擊的火石灼燙着
我習慣了的黑暗

(23) 原詩「走向冬天」の引用部分：

「風把麻雀最後的餘溫／朝落日吹去
「走向冬天／在江河凍結的地方／道路開始流動／烏鴉在河灘的鵝卵石上／孵化出一個個月亮／誰醒了，誰就會知道／夢將降臨大地／沉澱成早上的寒霜／代替那些疲倦不堪的星星／罪惡的時間將要中止／而氷山連綿不斷／成爲一代人的塑像

なお、戈麥に關する評論には以下のものがある。

西渡：「戈麥的里程」、『啓明星』二二期（發行年月日未詳）、『葵』創刊號（一九九二年一月、未見）、『發現』三期（一九九二年一二月、未見）

「拯救的詩歌與詩歌的拯救——戈麥論」、『詩探索』（一九九六年二期）

「死是不可能的」、『戈麥詩集』、麥童・曉敏編『利斧下的童話』（一九九四年一月、上海三聯書店）

臧棣：「犀利的漢語之光——論戈麥及其詩歌精神」、『今天』二〇期（九三年一期）、『戈麥詩集』、『發現』三期

桑克：「黑暗中的心臟——回憶一九八九年至一九九一年的戈麥」、『一行』一六期（一九九二年四月）、『現代詩』一八期（中華民國八一年九月）、『戈麥詩集』

嚴力：「脊背上的汚點」、揭載誌同前及び『葵』創刊號、『發現』三期

「一個詩人的創新」、『一行』一六期、『戈麥詩集』

徐江：「戈麥」、『葵』創刊號、『戈麥詩集』

楊平：「年輕的盜火者」、『戈麥詩集』

朱大可：「死亡的寓話」、『利斧下的童話』